

仏独共通歴史教科書

－ 作成現場からの中間報告 －

エティエンヌ・フランソワ

剣 持 久 木 訳

歴史教育における極めて重要な一步が、フランスとドイツにおいて印されている。初めて、異なる二つの国の高校生、フランスのリセ最終学年、第一学年とドイツギムナジウムの対応学年（州ごとに中等教育年限が異なるので、12年生と13年生、あるいは11年生と12年生）、それに歴史の教員たちが、もし彼らが望むのであれば、（カバーから判型に至るまで）全く同一内容の歴史の教科書を使用することができるようになったのである。それらの教科書は現行の指導要領にも適応しており、バカロレアやアビトゥーアにも対応している。2006年秋に刊行された最終学年向けの教科書は、336ページで、1945年から現在までのヨーロッパと世界の歴史を扱っている¹。2008年春に刊行された第一学年向けの教科書の方は、やや厚くなって387ページで、ウィーン会議から1945年までを扱っている²。これらの二冊の教科書は、ドイツ側はペーター・ガイス、フランス側はギヨーム・ルカントレックとダニエル・アンリを中心に両国それぞれ10人の歴史教員がペアになって執筆している。教科書は、フランスではナタン社、ドイツではクレット社という、両国における代表的教科書出版社が刊行している。教科書は全3巻で構成されるが、古代から1815年までをカバーする第三巻は現在準備中であり、刊行は2010年を予定している。

1 Peter Geiss et Guillaume Le Quintrec (dir.), *Histoire/Geschichte. L'Europe et le monde depuis 1945, manuel d'histoire franco-allemand, Terminales L/ES/S*, Paris Nathan 2006 (avec CD-Rom comportant un chapitre supplémentaire pour les Terminales S: " La colonisation européenne et le système colonial " et 38 sujets de préparation au Bac); Guillaume Le Quintrec et Peter Geiss (Hg.), *Histoire/Geschichte. Europa und die Welt seit 1945, (Deutsch-französisches Geschichtsbuch, Gymnasiale Oberstufe)*, Leipzig, Ernst Klett Verlag, 2006. 訳注: 『ドイツ・フランス共通歴史教科書【現代史】1945年以後のヨーロッパと世界』福井憲彦/近藤孝弘監訳、明石書店、2008年

2 Peter Geiss, Daniel Henri et Guillaume Le Quintrec (dir.), *Histoire/Geschichte, L'Europe et le monde du congrès de Vienne à 1945 (Manuel d'Histoire franco-allemand, Premières L/ES/S)*, Paris 2008; Daniel Henri, Guillaume Le Quintrec, Peter Geiss (Hg.), *Histoire/Geschichte Europa und die Welt vom Wiener Kongress bis 1945 (Deutsch-französisches Geschichtsbuch, Gymnasiale Oberstufe)*, Leipzig, Ernst Klett Verlag, 2008.

起原、構想そして実現の諸条件

共通教科書の起原は、2003年1月の仏独友好条約40周年の機会に遡る。友好条約の意義を強調するために、当時の、アメリカの対イラク戦争開始の見通しと仏独の一致した軍事介入拒否という空気に特徴づけられた国際状況のなかで、両国の当局者はベルリンに青少年議会を招集し、仏独関係を討議し、その活性化のための提案を求めたのである。その場で提案されたものの一つが、「相互理解を深めるために、両国のための同一内容の、仏独歴史教科書の実現」であった。この提案はただちに、両国政府から歓迎され、シラク大統領とシュレーダー首相の明確な支持のもとに、実現に向けて動き出すことになった。

出発点は、このように、市民社会のイニシアチブであった。しかし、たちまちこのアイデアは、両国政府機関によって採用されることになった。当初から存在した、この政治的方向性は、どんなに強調してもし過ぎることはない。というのは、それなくしては、真の仏独教科書は決して日の目を見なかったか、あるいは、せいぜい机上の空論に終わっただろうからである。実際、最初の具体的措置は、この提案が実現するための政治的そして技術的条件を創出するという仕事であった。フランス側では、事は比較的簡単であった。必要な手続きは、外務省の支援の下で国民教育省が担当することになった。ドイツ側でも外務省が関わっている。しかし、ドイツは連邦国家であり、教育問題は州の権限に属しているため、まず第一に16州の同意を得ることが必要であった。そのためには、2003年6月から11月にかけて3度にわたる全州教育省連絡会議が開催されることが必要であった。一連の作業の中で重要な役割を演じたのが、ザールラント州首相（キリスト教民主同盟）にして仏独協力条約の枠内での文化問題担当のドイツ連邦共和国全権でもあった、ペーター・ミュラーであった。

これらの前提条件が獲得されて、両国は、将来の教科書の仕様書を作成し、教科書実現までを監督する任務を担った、両国同数のメンバーからなる指導委員会を設置することを決定した。20人ほどで構成されるこの委員会には、隣国の歴史や教育に詳しい歴史家、教育関係機関（視学官、国際関係協力担当官、全州教育省連絡会議）の代表者、それに外務省の代表者が加わっていた。委員会の最初の会合は2004年1月にザールブリュッケンで開催され、以来、（筆者も当初からそのメンバーである）この指導委員会は、フランスとドイツで15回ほど開催されてきた。

最初の段階で指導委員会が取り組んだのは、達成目標の明確化と仕様書の作成であった。最初の作業の成果は、2004年5月13日にパリで開催された仏独閣僚会議で承認されている。このとき決定された方向性は次の通りである。フランス語版、ドイツ語版いずれも同一内容の教科書の作成、つまり仏独共通の歴史教科書であって、仏独史の教科書ではないこと。教科書は、フランスの第2学年、第一学年、最終学年、ドイツの上級ギムナジウムの3学年向けに、三分冊で構成されること。フランスとドイツ各

州の現行指導要領に可能な限り最大限適合した内容を追求すること。ヨーロッパ史に重点を置き、各章や節には同様の構成やヴィジュアル性を重視し、教科書執筆者のテキストの量を制限する（全体の五分の一から四分の一）こと。原史料や生徒の自習を助ける多様な資料の掲載を優先すること。さらに、仏独「付加価値」に気を配り、両者間の比較、移転、認識、解釈それに適応の特殊性、さらには用語の相違などを十分に浮き彫りにすること³。

指導委員会は、次に、教科書全三巻に同等にふりわけ、「ヨーロッパ史の古代における礎」から「1945年以後のフランス人とドイツ人、模範的協力関係か？」までの各18章を決定した。各章ごとに、指導委員会は、内容と主題を明確にするために一ページの概要を作成した。管轄当局の要望に応じて、政治的象徴性を考慮して、最初に刊行する教科書は、最終学年向けの巻となった。次の段階は、フランスとドイツの教科書出版社を公募することであった。最初から明白であったが、このような教科書は経験豊かな執筆者と仏独ペアで作業できる熟練の編集者でなければ任せられないし、仕様書に従い同一内容のテキストと図版を載せた教科書を両国で同時に出版することが条件となる。指名を勝ち取った出版社ペアは、ナタン社とクレット社で、両社とも両国における教科書出版社の世界では抜きん出た地位を占めている。

2005年始めに、両出版社は合意の上で、最終学年の教科書執筆を2人の経験豊かな責任者、フランス側はギヨーム・ルカントレック、ドイツ側はペーター・ガイスに任せている⁴。次いでこの2人は、彼ら自身もペアで作業する執筆者のチームを招集した。2005年から2006年始めにかけては、各章の執筆、掲載資料の選択、両言語への翻訳に費やされたが、日程は極めてきついものであり、執筆者たちにとっては前例がなくすべてがゼロからスタートしているだけに一層厳しいものであった。いくら強調してもし過ぎることのないこれらのプレッシャーにもかかわらず、すべての作業は、相互理解を深める形で、執筆者チームと指導委員会の間の絶え間ない対話の中で実施されていった。最終学年向けの教科書の原稿が完成するやいなや、次の第一学年向け教科書の準備がスタートしているが、そのおかげで、これは、最終学年向け教科書制作過程で得られた経験を生かしたからであるが、それが2008年春に刊行することを可能にしている⁵。

3 Pierre Monnet, "Un manuel d'histoire franco-allemand", in: *Revue Historique*, CCCVIII/2, 2006, p. 409-422

4 ギヨーム・ルカントレックはフェネロン高校（パリ）グランドゼコール準備学級の歴史教員で、ペーター・ガイスはボンのフリードリヒ・エーベルト高校の歴史とフランス語の教員である。

5 第一学年向け教科書から執筆代表者に加わった、ダニエル・アンリは、アンリ四世高校（パリ）グランドゼコール準備学級の歴史教員である。

前史と前提条件

刊行された二冊の教科書の紹介や内容分析、乗り越えて来た障害などを述べる前に、誰もが避けて通れない、大事な疑問に答えるために歴史を遡ってみる必要がある。つまり、なぜ、このような企画をドイツ人とフランス人が最初に考えたのか、という疑問である。なぜ仏独であって、フランスとイタリア、ベルギーとオランダ、スペインとポルトガル、ドイツとオーストリアではなかったのか。

この答えを求めるにはまず、一世紀以上の父祖伝来の敵対関係⁶を克服しただけに模範的といえる仏独和解という側面の中だけでなく、両国関係のあらゆるレベルでの緊密化の中に求めることが大切である。戦後両国社会の変化を印してきた収斂、(エアバスからアルテまで)両者を接近させる様々な協力関係の中に、要は、最終学年向け教科書の最後の二章(第16章:1945年以後のフランスとドイツ — 一致する経済、社会の動向、第17章:ドイツ・フランスは模範的協力関係を示しているのか?)が扱っているあらゆる変化や現実と、それがもたらす、現在と過去についての相互認識の中にこそ、それを求めるべきである⁷。実際、ここ数十年来フランス人とドイツ人の大多数は、隣国はもっとも近い同盟国であり、もっとも信頼できる国であると認識している。両者は、隣国の過去は自国の過去の一部を形成しているとみなすことを学んできたし⁸、そこから互いの歴史の絡み合いや、両者を特徴づける多様な相互干渉、両者が共有する争いや和解の記憶の場などへより一層関心を持つようになってきた⁹。

仏独共通教科書はまた、最近コリーヌ・ドゥフランスとウルリッヒ・プファイルが指摘したように、その起原は20世紀前半に遡る、仏独の歴史家同士の長い協力作業の結実でもある¹⁰。最初のイニシアチブは、1930年代にドイツの中世史家、フリッツ・ケルン(ボン大学)とフランス人評論家ジャン・ド・パンジュによるもので、残念ながら実現はしなかったが、両国の歴史家のための参考文献になるはずの全三巻の『仏独関係史』の計画であった。そのすぐあとで、両国の民間組織のイニシアチブで、両

6 Michael Jeismann, *La Patrie de l'ennemi*, Paris, CNRS, 1997 (原著: *Das Vaterland der Feinde. Studien zum nationalen Feindbegriff und Selbstverständnis in Deutschland und Frankreich 1792-1918*, Stuttgart, Klett, 1992).

7 Hartmut Kaelble, *Nachbarn am Rhein. Entfremdung und Annäherung der französischen und deutschen Gesellschaft seit 1880*, Munich, Beck, 1991; idem, *Sozialgeschichte Europas. 1945 bis zur Gegenwart*, Munich, Beck, 2007.

8 Valérie Rosoux, *Les usages de la mémoire dans les relations internationales. Le recours au passé dans la politique étrangère de la France à l'égard de l'Allemagne et de l'Algérie de 1962 à nos jours*, Bruxelles 2001; Jean-Noël Jeanneney et Philippe Joutard (dir.), *Du bon usage des grands hommes en Europe*, Paris, Perrin, 2003.

9 Etienne François et Hagen Schulze (dir.), *Deutsche Erinnerungsorte*, 3 tomes, Munich, Beck, 2001 (フランス語抄訳版: *Mémoires allemandes*, Paris, Gallimard, 2007).

10 Corinne Defrance et Ulrich Pfeil, "Le manuel franco-allemand d'histoire: L'aboutissement d'un long travail de coopération entre historiens français et allemands", *Document d'études* n° 11 (décembre 2006) du comité d'étude des relations franco-allemandes (Ifri).

国の歴史家の最初の交流が実現している。それは1935年には、相互理解の精神で、17世紀から20世紀までの両国の歴史教育を改善することを目的とした、39項目の勧告と最終報告に結実している。この二番目のイニシアチブもまた、政治的状況ゆえに死文化してしまう。しかしながら、第二次世界大戦が終わるやいなや、それは1951年には、ドイツの歴史家、ゲオルク・エッカート（後の、今日では彼の名前を冠しているブラウンシュヴァイクの国際教科書研究所の所長）と、フランス歴史地理教員協会（APHG）の会長エドアル・ブルーレイによって復活している。それ以来開催された定期的な会合において、ある種の地ならしをしてきた隣国の歴史教育改善を目的とした一連の勧告を作成してきた。さらに、そこから、互いの視点を交差させ、両国ペアの執筆陣に任せるために両国ペアの出版社に仏独関係史を共同出版するという考えも生まれている¹¹。

このような教科書が実現するためには、数十年来、仏独の中等教育や大学の教師たちが一緒に作業する習慣を育んできた数多くの機関の存在をぬきには不可能であっただろう。つまり、そこでは、方法論的な進歩、教育上の経験、そこから生まれた仏独歴史家たちの世界が出現したのである。教育上の実践とならんで仏独教科書構想のなかで重要な位置を占めている比較研究の起原は、希代の仏独史家であったマルク・ブロック、1927年のオスロでの国際歴史学会議での彼の報告を基に書かれた比較史についての有名な論文に遡る¹²。そこで示された、「文化移転」や「交差史」のアプローチは、比較研究を補完すると同時にそれを乗り越えるものでもあるが、それらもまたまず仏独の間で築かれた基礎の上に発展していくことになる¹³。中等教育制度においては、仏独リセ、「アビバック」コース、ヨーロッパ学級などが、隣国の歴史や文化を重視することによって、歴史教育の基礎を作ってきた¹⁴。最後に、いくら強調してもし過ぎることはないのが、隣国の歴史を知る上でそして（歴史はもちろん学術文化や教育実践についても）隣国を専門とする歴史家の育成の上で、ドイツ歴史研究所（パ

11 このアイデアは、パリのドイツ歴史研究所に採用され、社会科学高等研究院と共同で、現時点ではドイツ語版のみであるが、Werner Paravicini、Gudrun Gersmann それにMichael Wernerの編集で、仏独通史(*Deutsch-französische Geschichte*) の出版が企画されている。すでに5冊が刊行されている。vol. 1: Rolf Grosse, *Vom Frankenreich zu den Ursprüngen der Nationalstaaten : 800-1214*, Darmstadt 2005; vol. 3: Rainer Babel, *Deutschland und Frankreich im Zeichen der habsburgischen Universalmonarchie: 1500-1650*, Darmstadt 2005; vol.4: Guido Braun, *Von der politischen zur kulturellen Hegemonie Frankreichs: 1648-1789*, Darmstadt 2008; vol. 5: Bernhard Struck et Claire Gantet, *Revolution, Krieg, Verflechtung: 1789-1815*, Darmstadt 2008.

12 Marc Bloch, "Pour une histoire comparée des sociétés européennes", in *Revue de synthèse historique*, t. 46, 1928, p. 15-50.

13 Michel Espagne et Michael Werner, "La construction d'une référence culturelle allemande en France. Genèse et histoire", in: *Annales E.S.C.*, 1987, p. 969-992; Michael Werner et Bénédicte Zimmermann (dir.), *De la comparaison à l'histoire croisée*, Paris, Seuil, 2004.

14 指導委員会のメンバーには、ザールブリュッケンの仏独リセの校長も入っている。ドイツ側教科書執筆者の中には、歴史とフランス語両方を担当している教員が数人おり、フランス側執筆者の中には仏独リセの教員一人とドイツのフランスリセでの教員経験者が2人含まれている。

り)、フランス歴史使節団(ゲッティンゲン)、マルク・ブロックセンター(ベルリン)などの諸機関が果たして来た役割である。共通教科書指導委員会にも多くの代表を送り込んでいる、これらの諸機関は、フランスの歴史家ジャン・ピエール・リュウが「双方向の効用」と呼ぶことを提案したことの証しとなっている¹⁵。

障害と困難

これらの好条件が存在したとはいえ、最初の共通教科書の実現に障害がなかったわけではない。幸運にも、真の意味での困難が生じたのは、最終的な執筆段階になって初めてのことであった。一般に予想されていたのとは異なり、もっとも重要な障害は、歴史解釈に関わる問題ではなかった。章の選択、両国の最終学年生の知識の共通の土台を構成する中身の決定、出発点の主題の準備などは問題を生じさせなかったし、途中で生じた執筆陣や指導委員会の再編成なども同様であった。最終学年向け教科書における、真の相違点といえるのは、1945年以後のヨーロッパと世界におけるアメリカの役割と、社会主義の経験についての紹介と解釈についての二点だけであった。フランス側は、超大国アメリカの利権を考慮に入れたその際立った役割を紹介することを望んでいたが、ドイツ側は、ヨーロッパと世界における自由の擁護者としてのアメリカの寛大な役割を強調する傾向があった。逆に、人民民主主義や社会主義、共産主義運動の紹介においては、ドイツ側は社会主義陣営の一枚岩的、専制的、抑圧的側面を強調したが、フランス側においては、共産主義ユートピアは、一時は、資本主義的自由主義的モデルに代わるオルターネイティブとして信頼できるものとして考えられていたこと、そして社会主義社会にも相対的自立性があったことを喚起したいという願望が表明されていた。これらの相違点については、それを隠蔽するのではなく、それがもっとも顕著な部分(第二部:二極世界の中のヨーロッパ、1949-1989)全体を通じて正面から引き受けている。つまり、仏独の間の認識や政治文化の違いを浮き彫りにし、適切な資料を選択し、相違点を主題化する助けになるような論点整理や学習の手引きを提示し、さらには共産主義や対米関係についての認識が両国で異なる点をまとめた「仏独の交差する視点」のページを章末に加えている。

途中で遭遇した本当の障害、2004年春に議論の陶酔感が一段落してから指導委員会が直面した袋小路に近い障害であるが、それはむしろ、仏独それぞれにおける、過去との関係、中等教育の中での歴史の位置、教育上の実践、歴史叙述方法の中に存在す

15 これについては、以下の雑誌特集号と、とりわけ筆者が「双方向の効用」について執筆依頼された論文(91-95頁)を参照されたい。" Apprendre l'histoire de l'Europe " réuni sous la direction de Jean-Pierre Rioux dans le numéro 71 (juillet-septembre 2001) de *Vingtième Siècle, revue d'histoire*. 指導委員会のメンバーのうち3人は、ゲッティンゲンの歴史使節団の団長経験者で、一人はマルク・ブロックセンターの元所長、一人はパリのドイツ歴史研究所の元所長である。

る、違いあるいはコントラストに関わるものであった¹⁶。まず科目区分の相違がある。フランスでは、歴史と地理は構造上密接な関係にあり、地図が多用され歴史における空間の役割が重視されるのに対して、ドイツにおいては、歴史はまず哲学、ドイツ語学あるいは社会科学や政治学とむしろ深い関係があり、概念、用語、理念や理論、史学史や反省性が大きく注目され、空間についてはそれほど大きな地位が与えられていない¹⁷。第2の相違点は教育上の実践に関わっている。フランスにおいて優先されるのは、生徒への知識の伝達であり、教員には大きな役割が与えられているが、ドイツにおいて重要視されるのは、個人やグループの作業や議論である。それに加えるコントラストとしては、フランスにおいては、全国共通のバカロレアを準備するために全員に一律に課せられた指導要領が存在するのに対して、ドイツにおいては各州に固有の指導要領があり、そもそも指導要領の拘束がゆるく（とりわけ、「重点学習科目Leistungskurs」と呼ばれる応用歴史教育の学級においては）、州ごとにアビトゥーア取得方法が異なっている（バイエルンのような州では中央アビトゥーアがあり、ノルトライン・ヴェストファーレン州やベルリンでは学校ごとに個別アビトゥーアがある）。三番目の相違点としては、教科書承認までの手続きがある。フランスにおいては、現行の指導要領に明確に従っていれば十分であるのに対して、ドイツの各州は固有の認証手続きがあり、新しい教科書の完成稿を提出するまで承認されない（各州教育省が修正を求める場合もある）ということがあり、これによって生じる日程上の重大な問題に、われわれはそれを軽くみていたため、最終学年向け教科書完成の最終段階で直面することになった。フランス語版の教科書は印刷目前だったのであるが、例外的なスピード（というのも、ドイツ連邦共和国史上はじめて、一つの教科書が16の州の承認を得たのである）で手続きが行われたとはいえ、ドイツにおいて出版許可を得るまで数週間待たされたのである¹⁸。最後の相違点は、歴史叙述の方法に関わっている。ドイツにおいては歴史は、その科学性を高らかに宣言（歴史科学と定義されている）し、大学レベルの歴史学（従ってアカデミックな文体や文字史料へのこだわりとなる）に倣ったものとなり、生徒に対しては内面的な倫理的政治的作用（最重要の目標の一つは依然、ナチズムや全体主義との批判的対決と、自由で議会主義的な民主主義への教育である）をすることを期待している。それに対して、フランスにおいて歴史は、

16 詳細については、以下の拙稿を参照されたい。"Rapport à l'histoire" in: Jacques Leenhardt et Robert Picht (dir.), *Au jardin des malentendus. Le commerce franco-allemand des idées* (nouvelle édition augmentée et actualisée), Arles, Actes Sud, 1997, p. 17-24. さらに、ピエール＝オリヴィエ・フランソワがアルテのために制作し、2007年1月18日に放映された番組、"Chacun son histoire?"も参照されたい。

17 これに関しては以下を参照。Etienne François, Jörg Seifarth et Bernhard Struck (dir.), *Die Grenze als Raum, Erfahrung und Konstruktion. Deutschland, Frankreich und Polen vom 17. bis zum 20. Jahrhundert*, Frankfurt/M., Campus, 2006.

18 驚くべきことに、各州から、最終学年向け教科書に対して出された修正要求は、極めて限られており、それは、資料二つの差し替えだけであった。

文学や物語により近いものであり、図像、表象それに文化遺産などがより重要視され、公民教育は、ドイツ以上に普遍的コンテクストの中に位置づけられている。かくして直ちに気づく相違点としては、たとえ適切な翻訳を経たとしても、例えばこうである。ドイツ側の執筆者が書いたテキストでは抽象的な表現や受動態、過去形が目立つのに対して、フランス側の執筆者は、比喩やメリハリの利いた言い回しを多用して、現在形を好んでいる。

これらの障害を乗り越えるのは、最終学年向け教科書にとってはとりわけ（一年半後に出版される第一学年向けの教科書は、経験を踏まえることができたために、質的にもより良いものになっている）、容易いことではなかったし、われわれがそれに成功した、と言い切ってしまうことは傲慢であろう（細心の点検にも関わらず見逃してしまった誤植や誤記を別にしても）。我々が選択した解決策は次の通りである。教育上の実践の「いいとこどり」での収斂を可能な限り実践（かくして「フランス式の」地図と「ドイツ的に」長文で濃密な文字史料を組み合わせたり、フランスの最終学年にもドイツの「重点学習科目」にも適応するような練習問題や学習の手引きを掲載した）すること。専門用語の問題には特別の注意を払うこと（各章には多くのキーワードが掲載され、さらに各部の最後にはキーワードが仏独英三か国語で掲示されている）。フランス側、ドイツ側双方で蓄積されてきた豊富な史料を掲載し、各章には議論を深めるための二つから三つのテーマ学習資料を掲載すること。各章の最後には「仏独の交差する視点」と補足情報（文献目録、映画、小説、博物館、インターネットサイト等）を掲載し、巻末には30ページに及ぶ方法論、人物、用語解説の付録を加えること。さらに最後に心がけたのが、最初に隣国の言語で書かれたテキストを細心の注意を払って点検し、直訳すぎる箇所を避けるよう努めたことである。指導委員会のメンバーで、ドイツにおけるフランス歴史使節団の元団長でもあり、現在は仏独大学の学長であるピエール・モネがまさに次のように適切に指摘している。「歴史においては、いつものことであるが、翻訳者は言語よりも文化の問題に直面する。例えば、ライシテ（政教分離＝訳注）というフランス語は、ドイツ語には相当する言葉がない。というのも、ドイツでは、国家と教会の間には、協力関係が存在するからである。同様に、フランス語のメモワールという言葉は、思い出、記憶、文化遺産、記念など意味しているが、ドイツ語ではそれぞれ言葉も概念も細かく区分けされている¹⁹。」

ここで具体的に一つの章を例にとって、執筆者がどのように困難を克服しようとしたかを見てみよう。最終学年向け教科書の第二章「第二次世界大戦の記憶」（30-45頁）。章の冒頭の見開きには、左側ページに目次、主題解説、それに主要な出来事を横に並べた年表（ドイツの降伏からノルマンディ上陸60周年まで）が掲載され、右側ページ

19 Pierre Monnet, "Faites un manuel, pas la guerre!", in: *L'Histoire*, n° 312, septembre 2006, p. 22-23.

には二枚の大きなカラー写真、ノルマンディのアメリカ兵墓地の写真と、アンネ・フランクの日記が11か国語へ翻訳された書物の写真とが掲載されている。この章は四つの課に区切られている。「勝利の祝典から記憶の義務へ」「ショアの記憶」「フランス人と第二次世界大戦ーヴィシー症候群」「1945年以後のドイツとその記憶文化」。各課においては教科書執筆者の本文は五分の二程度のスペースを占めており、残りは資料にあてられている。さらに、第2,3,4課には資料に重点をおいた（そこでは本文は八分の一程度しか占めていない）次のようなコーナーが補足している。「世界各地のショアの記憶の場（パリ、エルサレム、アウシュヴィッツ、ワシントンそれにベルリン）」、「フランスにおけるショアの記憶」そして「犯罪者か犠牲者か？過去に直面するドイツ人」。章全体では（フランス側5つ、ドイツ側6つを含む）14の文字史料、24の図像史料、一つのグラフが掲載されている。それに加えて、11の語彙、5つのキーワード解説、33の「学習の手引き」（「日本は戦後、自らの過去についてどのように認識して来たのか」のようなテキストの分析をもとめるものから、「あなたは、敗戦国が連合軍勝利の記念式典に参加すべきと思うか」というような、議論を提起する問いまで）がある。章全体の構成としては、最初に（ヨーロッパだけでなく世界全体の）全般状況があり、議論や論争に十分紙幅を割きつつ、ついで仏独の状況が（東西ドイツの違いも考慮にいれつつ）それぞれ並べられている。

むすびにかえて：受容と展望

仏独共通歴史教科書は、出版と同時に膨大な批評の対象となっている。ジャーナリスト、大学関係者、歴史家など数えきれないが、ここでは、当然のことながら共通教科書の画期性への称賛、斬新さと貢献への評価から、共通教科書の弱点や不十分さについての（なかには教科書の制約についての無知に由来するものもないではないが）批判に至るまで多様である²⁰。すべての批評が一致して認めているのが、共通教科書には、教育的と同時に（公民的意味において）政治的な射程があるという点である。さらにまた、共通教科書構想が仏独をベースにしたものであっても、ヨーロッパ的、超国家的な展望を持っているということも批評家たちが一致して認めているところである。つまり、多様な歴史的遺産や教育的蓄積を共有することで、共通教科書は、固有の国民文化の特殊性を認めつつも、共通の未来のための国境を越えた展望の中で、それらの特殊性を超越しつつ引き受けるという、過去についての一つの見方を育むこ

20 管見の限りでは、最終学年向け教科書へのもっとも網羅的な批評は以下の雑誌特集号である。*Dokumente. Zeitschrift für den deutsch-französischen Dialog*, 5/2006, p. 53-102 (dossier coordonné par Reiner Marcowitz et Ulrich Pfeil). 第一学年向け教科書については同様の批評が、コリーヌ・ドゥフランス、ライナー・マルコヴィッツ、ウルリヒ・プファイルを中心として、パリのドイツ歴史研究所、ブラウンシュヴァイクのゲオルク・エッカート研究所の協力の下で、(英独仏三か国語で)以下のサイトにアップされている。 <http://www.gei.de/index.php?id=1298&L=0>

とに貢献しようとしていることである。一見すると、1988年にフレデリック・ドリューシュのイニシアチブに始まり、13カ国の歴史家と教育専門家たちが執筆した『ヨーロッパの歴史』²¹ に比べて野心的でないようにも見えるが、仏独共通教科書の方には、遥かに優位性がある。こちらの方は当該国の教育機関の支持の下に実現したのであり、現行の指導要領に適応しており、直ちに正規の教科書として使用可能であり、さらに付加価値として共通教科書ならではの補足情報や仏独の交差する視点が加えられている。『ヨーロッパの歴史』は、真の意味で国境を越えた教材を作成することの困難さを浮き彫りにしただけで、玄人受けに留まっていたが、最終学年向け仏独共通教科書の方はすでに、2006年秋時点で6万部以上（その中には、ドイツで購入されたかなりの数のフランス語版と、フランスで購入されたそれ以上数のドイツ語版が含まれている）が売れている。

国際的な反響、とくに東アジアでの共通教科書の反響は大きかった。日本と韓国がその筆頭である。というのも、最終学年向け共通教科書は、日韓両国で翻訳されている。日本においては、剣持久木、西山暁義両教授のイニシアチブで、共通教科書を調査する国際的な研究グループが形成されており、共通教科書の射程やその受容について詳細な情報収集が行われている²²。仏独共通教科書の出版は、岩崎稔教授が主催する「東アジア歴史フォーラム」にも刺激を与えている。さらに筆者自身、2008年11月に上海で開催されたシンポジウム「ヨーロッパとアジアにおける第二次世界大戦の記憶」に招かれて、共通教科書の紹介をしている。

ヨーロッパにおいても、仏独のイニシアチブは、ポーランドとドイツの間での比肩しうるイニシアチブの立ち上げに際しては、少なからぬ役割を果たしている。こちらの企画は、ブラウンシュヴァイクのゲオルク・エッカート研究所とポーランド学術アカデミーのベルリン歴史研究センターが協力して携わっている。仏独共通歴史教科書と同様に、こちらでは、全三冊の同一内容の教科書を、ポーランドとドイツの執筆者が合同で執筆し、中等教育の上級三学年向けを予定している。

これらの影響がいかに重要であれ、それらが間接的かつ外部的なものであることには変わりはない。仏独共通歴史教科書はまず第一に両国の高校生と教員に供されたのである。この点では成功したといえるのだろうか。フランスとドイツの歴史教育において共通教科書の影響力についての最初の総括をすることは可能だろうか。さしあたり、売り上げ部数が一つの答えになるだろう。出版社から伝えられた情報によると、2009年春時点で、最終学年向け教科書は9万部、第一学年向けは3万部とのことである。この数字自体は決して少ないとはいえない。とはいえ、新しいタイプの歴史教科

21 *Histoire de l'Europe* (Paris, Hachette, 1992); *Europäisches Geschichtsbuch* (Stuttgart, Klett, 1992). 訳注: 『ヨーロッパの歴史』木村尚三郎監修、花上克己訳、東京書籍、1994年

22 Akiyoshi Nishiyama, "Ein Ziel in weiter Ferne? Das deutsch-französische Geschichtsbuch aus japanischer Sicht", in: *Revue d'Allemagne*, 41-1 (2009), p. 105-123.

書に両国の歴史教員たちが夢中になって飛びついたということを示しているわけでもない。というのは、かなりの数の部数が一般の読者や地方公共団体（アルザス地方など）によって購入されたことを別にすれば、各地で集計した量的な分析によれば、正規の教科書として仏独共通教科書を使用している学校の数を決して多くはないからである。新しい教科書を前にして、教育施設や歴史教員たちは、慎重な関心を示しており、たいていの場合様子見をしているのである。新しい教科書を採用しているのは、関心もモチベーションも高い教員たちによる個別の選択に負っているところが一般に多く、しかも副読本の扱いが殆どである。共通教科書は、「通常の」教科書を補足するのであって、とって代わったり競争相手になったりはしていない。最後に、共通教科書は、隣国の言語教育には役立っている。

第一学年向け教科書の売り上げの停滞や、大半の教員による共通教科書の間接使用しないしは留保については、楽観することはできない。現時点では、これは、仏独共通歴史教科書の実験は大半の対象を本当には説得できていないというしるしである。バカロレアやアビトゥーアの受験準備を第一に考えている教員や高校生は、共通教科書の「付加価値」の二つの構成要素、つまり隣国の歴史や文化についてのより深い知識を習得することと、比較と多様性の展望でヨーロッパを拡大すること、のなかには、最終試験での好成績を保証するわけではない、一種の余計な贅沢しか見いだしていないのが実情ある。もし、ライン川の両側で指導要領の調和と力強い収斂の方向性に、より真剣な努力が傾けられるなら、確実に別の結果が期待できるだろう。

最後に残った課題は、仏独共通歴史教科書という「モデル」をヨーロッパレベルに拡大することが可能であるか、という問題である。この教科書は、目的においても現実においても、ヨーロッパの教科書である。しかしだからといって、ヨーロッパ共通教科書を実現するためには、二国間が多国間になるだけで済む話だろうか。仏独共通教科書の経験自体に照らして、それは疑わしいと言わざるを得ない。隣国の歴史にかなりの紙幅を割きつつも通常の教科書の体裁を守る教科書を実現するためには、叙述の削減が必要であり、それは歪みも残念ながらもたらしている。第一学年向けの教科書では、ドイツにくらべてイギリスにあてられた叙述は少なくなっている。ところが、客観的にみれば、19世紀のヨーロッパや世界の歴史でイギリスはドイツに比べてはるかに重要な役割を果たしているのである。三か国、四か国の共通教科書になると、このような叙述の歪みは収拾不可能なほど大きくなることが予想される。したがって、二か国間アプローチから多国間アプローチに移行するためには、仏独教科書に使用した形式を断念し、別の解決策を想像しなければならないのは極めて当然のことであろう。それには、様々なヨーロッパの国々の指導要領を最高に調和させること、教員の相互交流の強化、そして各国の指導要領や教科書に記載すべき一定数の基準を共同で作成することなどが、前提になるだろう。しかしながら、そこまでたどり着くには多くの時間を要するだろう。いずれは、仏独共通教科書が時代遅れの段階になる時が来

るかもしれない。しかし、この段階は将来にとって不可欠のものであったのであり、現時点では、それに期待された効果をまだ十分には生み出していないのである。

訳者あとがき

エティエンヌ・フランソワ氏は、パリ第一大学、ベルリン自由大学の名誉教授であり、現在はナント先端研究所の常任研究員を勤めている。仏独関係史の第一人者であり、とりわけ本稿でも言及されている『記憶の場』のドイツ版 (*Deutsche Erinnerungsorte*) の編者として知られている。フランソワ氏は、平成20年度静岡県立大学特別研究推進費(研究テーマ: 歴史認識共有の実験—仏独共通歴史教科書の射程— 研究代表者: 剣持久木) による招請で、ザールラント大学教授ライナー・フーデマン氏と共に、2009年2月に日本に滞在された。滞在期間中は、東京外国語大学、日仏会館、同志社大学、共立女子大学など各地での講演、シンポジウム、研究会など、精力的に日程をこなされたが、本稿は、2月18日に、静岡県立大学と東京日仏会館の共催で開催した共同講演会「ヨーロッパ建設におけるフランスとドイツ」の中での同氏の講演「仏独共同歴史教科書: ヨーロッパの記憶の場?」の内容に後日加筆修正が施されたものを訳出したものである。ちなみに、本稿に登場する「東アジア歴史フォーラム」は、東京外国語大学で開催したシンポジウムで岩崎稔氏が披瀝したものである*。

本稿でも言及されているように、訳者は、2007年以来仏独共通歴史教科書についての共同研究を立ち上げ、教科書内容の分析はもちろん、教科書の社会的受容、使用現場での調査を実施してきた**。その過程で、仏独両国で、教科書執筆や、教科書を現場で使用する高校教員など多くの関係者から研究協力を得ることができたが、なかでも共通教科書の内容に決定的な役割を果たす「仕様書」Cahier de Chargesを作成した指導委員会の中心メンバーがフランソワ氏である。今回の訪日に際しては、仏独共通教科書の成立から現段階に至るまで、(残念ながらオフレコで本稿に反映されていない事実も含めて) 改めて貴重な情報を得、有意義な意見交換をすることができた。

2006年に最終学年(日本の高校三年生に相当)向け教科書が刊行され、2008年春には第一学年(高校2年生)向け教科書が刊行され、同年12月には日本語版も刊行され

※ 国際シンポジウム「歴史と記憶再考—『記憶の場』論の射程の再検討」(2009年2月17日、東京外国語大学) なお、同シンポジウムの模様は、『クワドランテ』(東京外国語大学海外事情研究所) 11号、2010年に掲載予定である。

※※ 科学研究費基盤B(研究代表者: 剣持久木、研究分担者: 西山暁義、川喜田敦子) 同科研のこれまでの研究成果としては、註22で言及された文献の他、以下のものがある。剣持久木/西山暁義「歴史認識共有の可能性-仏独共通歴史教科書の実験-」『歴史学研究』840号、2008年5月、西山暁義「国境を越える教科書」廣田功編『欧州統合半世紀と東アジア』日本経済評論社、2009年刊行予定、剣持久木「仏独共通歴史教科書の射程—使用現場調査と東アジアへの展望—」剣持久木/小菅信子/リオネル・バビッチ編『歴史認識共有の地平-仏独共通歴史教科書と東アジア』明石書店、2009年刊行予定

るなど、一見順調にも見える。しかしながら、高い理想とは裏腹に、本稿でも示唆されているように、(正規の教科書として) 使用されているのは独仏二言語学級等特殊なケースに限定され、教育現場への浸透はお世辞にも高いとは言えない。さらに、全三巻の最後の一巻である、第二学年(高校1年生)向け教科書に至っては、(一応2010年刊行の予定ではあるが) 内容の調整が難航し、刊行の目処がたっていないのが現状のようである。

歴史問題が政治問題として間欠的に浮上する東アジアにおいては、仏独共通歴史教科書の実験には否応なく注目せざるを得ない。しかしながら、もっとも先進的なヨーロッパにおいても二国間共通教科書がようやく端緒についたというのが現時点での冷静な評価であろう。現在準備中といわれるドイツ・ポーランド共通教科書の実現が現実味を帯びてからようやく、次のステップが見えるのかもしれない。東アジアでの歴史認識の共有の可能性を探るのが、訳者の究極的な課題ではあるが、それに先立ってヨーロッパにおける歴史認識共有の実験から見える射程と課題を今後も見極めていきたいと考えている。



講演会の模様(2009年2月18日、東京日仏会館)



エティエンヌ・フランソワ氏